

環境の変化と淡水産の貝類について

名古屋市立名北小学校 田 中 守 彦

1. はじめに

20 年以上前に、愛知県のはゞ全域にわたって淡水産の貝類の分布状況を調べ、それから 10 年後同じような調査を名古屋市内で行い、環境の変化の著しさ、種類の激減ぶりに驚いたものである。

近頃、一時見かけることの少なくなった野生のメダカが、名古屋市西部の富田町、南陽町で沢山見られるようになった。水の浄化や、蚊の駆除に役立つということで放たれたタッポミノウが予想以上に繁殖し、それにもなってメダカが激減したように見えた。もっとも、野生のメダカが減ったのは、タッポミノウに追いやられたというより、環境の悪化した水域が増えたため、悪条件下での生活に強いタッポミノウが残り、メダカが減ったのが真相だと言える。

淡水産の貝類の場合も、護岸工事その他で、環境の一部あるいは大半が変わってしまった場所では同じようなことが言える。しかし、中には工事前と工事後しばらくたったあとの分布状況にあまり差のない地域もあるのでそこを取り上げ、環境の変化と貝類の分布についてふれてみたい。

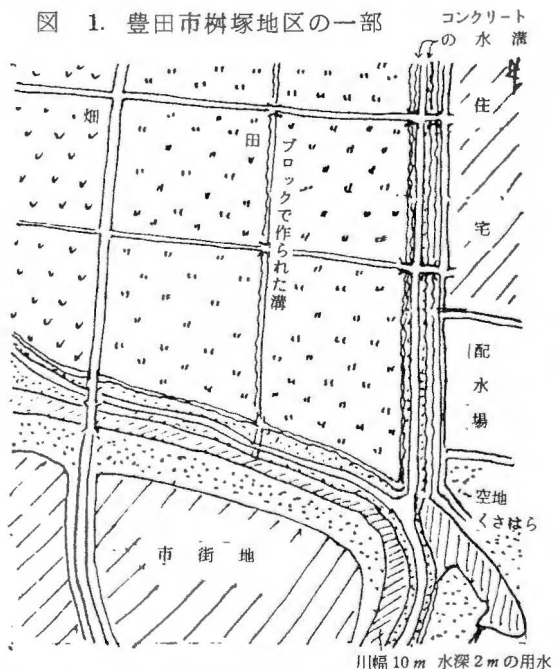
2. 豊田市の榑塚地区

豊田市の榑塚地区は、豊田市の南東の端矢作川の右岸にあり、灌漑用の用水が縦横に走っているところである。20 年ほど前には、用水の側壁が木板で補強され、泥質の水底に水草がよく茂り、川岸から川底をのぞくと、水草の根元付近に淡水貝が水管を開いている様子がよく見られた。また、魚類も豊富で元気よく泳ぐ姿がよく見られた。

この地域で見られた貝類は、タガイ、カタハガイ、オリエボシ、マツカサガイ、トンガリササノハ、イシガイ（マシジミ）といった大型の二枚貝、オオタニシ、マルタニシ、ヒメタニシのタニシ類、カワニナ、モノアラガイ、ヒメモノアラガイ、ヒラマキモドキ、カワコザラなど、愛知県内で見られる淡水貝のほとんどを有していた。また魚類では、大型二枚貝に産卵する魚として有名なヤリタナゴ、タビラ、アブラボテ、イチモンジタナゴのタナゴ類にヒガイまで生息していた。

用水路が護岸工事で側壁・底ともコンクリートに代わり、細い用水路はブロックが埋め込まれた様相が一変した。護岸工事が終了して 10 年以上経った近頃、貝類では、ブロックの埋められたところでは継ぎ目あたりにとどまって生活している。コンクリートで完備されたところでは、土

図 1. 豊田市榑塚地区の一部



川幅 10 m 水深 2 m の用水

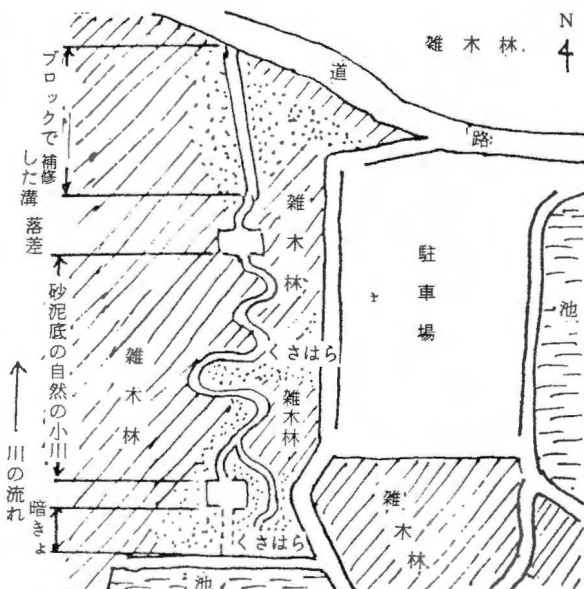
砂が10～15 cmも積もり、水深はいつも30 cmほどあり、流れがゆるやかなため、土手の上から見て泥底一面に点々と水管を開いている二枚貝をうかがうことができる。以前と比べ、オリエボシ、マツカサガイ、カタハガイなど、もともと僅かしか見られなかった種類の貝を確認することができなかった。また、径4 mmほどの平たい巻き貝のヒラマキモドキも見られなかった。新しく見られるようになったのは熱帯魚や水草と一緒にはいってきたサカマキガイぐらいであった。魚類では、タナゴ類に減少あるいは全く見られなくなったものが2、3種いたが代わりにタイリクバラタナゴが急激に繁殖して生育場所を広げているのは他の水の豊富な地域と同様である。

3. 森林公園内のある小川

中志段味から森林公園の中心部への道路に面した大池とその西側に造成された駐車場、雑木林を囲むように道が開けて南側の池へと続く、森林公園の植物園近くの地域である。池からオーバーフローした水が暗き溝を通してコンクリートのますに流れこみ、そこから雑木林の間を通りぬけて落差のあるえん堤から流れおちる。小川は川幅1 m、水深20 cmほどで曲り角がけずられてやや深みを作り、深さは30 cmの澗になる。

以前はここに、タガイ、イシガイ、マツカサガイ、マシジミの二枚貝と他に、マルタニシ、ヒメタニシ、カワニナ、ヒメモノアラガイがいたが、下流域がブロックで完備された近頃では、カタハガイが姿を消し代わりにサカマキガイ、コシダカヒメモノアラガイが見られるようになった。

図2. 森林公園内のある小川



4. まとめ

二つの場所で共通していることは、護岸、改修工事で一部あるいは全面にわたって手が加えられたが、貝類の生息状況は、僅少だった種類に現在見られなくなったものもあるが他の地域では稀にしか見られない種類もここでは工事前と同じ程度、中にはかえって量を増したものもあり、環境の変化が大きかった割に種類の変動が少なかった地域といえる。

淡水産の貝類の場合、大型の二枚貝のタナゴ類との共生関係、タニシ類の卵胎性（仮）モノアラガイ類のゼラチン状の卵塊など、他動物や自然の悪条件にも身を守り得る生活様式をもつものも多く、工事で一旦住み慣れた場所を失っても他の地域で生きのび、工事後以前の環境に近づいた頃もどって来ると思われる。しかし、絶滅の危機に瀕しているものについては、住みついている環境がくずれたとき、狭い環境条件でしか生活できないため、他に定着できる条件の場所がないため、オリエボシ、カタハガイのように見られなくなっていくと考えられる。